質疑応答

特別講演　「東日本大震災後の陸前高田市におけるつながり続ける力」

佐々木　亮平（岩手医科大学教養教育センター人間科学科体育学分野）

Q1. つながるというと対面を考えるが、対面とオンラインでは違いがあるか？どの様なかたちでもつながる事が大事でしょうか？

A1. カメラ越しだと五感で感じる息遣いや雰囲気が伝わらず、限界があると思う。私自身は対面が良いと思うが、コロナ禍で変わってきた部分もあるので、それぞれの良さをうまく利用して行ければ良いのではないか。「二次元もリアル」となっていると思う。
　つながり方が変わっても対話し続ける姿勢を大事にしたい。

Q2. 曖昧な喪失を経験した人は今どのくらい回復しているのか？まだ支援は必要か？もしそうならどの様な支援が必要か？

A2. まだまだ居られる。何年経ったから良いということでもなく、日々の対話の時間がケアになり、緩やかに進んで行けることがある。
　時間と共に震災のこと、被災されたことを話せるようになってきた方もあるが、直接、震災のことを話さなくても、日頃の何気ないお話、雑談というと語弊があるかも知れないが、そうした話せる時間があることが実は一番大切ではないかと思う。

Q3. 地域における人と人とのつながりの重要性を再認識しました。図書館もコミュニティの核としての役割があると思っていますが、つながり続けるということについて、図書館に期待することがあれば教えて下さい。

A3. 図書館は親にも Google にも教えられない知識を与えてくれる場であり、司書からも情報を得られる。「はま・かだの場」としてもっと人の交流ができる場所になってくれると嬉しい。
　震災後も陸前高田市内の子育て支援の団体が、避難所の一つであった高田一中内の一画で活動を再開された際、絵本や本があることで子どもたちや親をつなげている場面があったことを思い出す。
実際に本があることで、多くの人をつなげてくれるという意味でも、図書館の居場所づくりとしての役割は非常に大きいと思う。